

インクルーシブ保育を考える その①

工藤ゼミでは、共生社会の手段としての「インクルーシブ保育」に取り組んでいます。インクルージョン、つまり「誰も排除しない」ためには、お互いを知ることから始まると考えます。実際に様々な立場の人と交流する経験によって、相手に対する理解が促進されると思います。

「インクルーシブ保育」を考えるきっかけとして、見晴台学園大学の学生と交流をしました。見晴台学園大学は、特別な支援を必要とする青年たちの「もっと学びたい」という要求に応え、青年たちが自分らしく豊かな人生を送るために開かれた大学です。



まずは、自己紹介をした後で、見晴台学園大学の学生による大学のユニークな講義についてのプレゼンを聞きました。



その後で、実際に見晴台学園大学の授業を一緒に体験しました。講師は福祉大卒業生の方で、この日は「箱の中身を言葉で相手に説明する」という内容を行いました。



制作のグループ



ゲームのグループ

演習授業によってお互いが打ち解けたところで、グループワークを行いました。ワークの内容はゼミ生が準備計画したもので、制作のグループとゲームのグループに分かれました。

以下、ゼミ生の感想です。

『自分たちと同じ大学生ですが、学びの中身が深く、自分から行動する力があると感じました。一緒に制作を行い楽しかったことはもちろんですが、話しかけたら応えてくれたり、向こうの方から話しかけてくれたりと関わられたことが嬉しかったです。』

『実際に様々な困難さを抱える学生たちと交流をして、実際に見るから分かる姿があると感じました。グループワーク後、見晴台の先生から、私がペアになった学生は、いつも制作をNGとする学生であることを伺い、驚きました。しかし同時に、NGであるにも関わらず、一緒に取り組み、楽しいと言ってくれたことがすごく嬉しかったです。やりがいというのは、そのような機会から感じるができると思いました。実際に自分の目で見て接することで気づくことは多くあると感じ、とてもいい機会を頂けたと思いました。』

インクルーシブ社会を考えるには、まずはお互いのことを「知る」ことから始まると思います。「対話」を通して、自分との共通点と相違点を感じる中で、共通点を軸に「違い」を認め合ったり、尊重しあったりすると思います。インクルージョンには、そのような経験が必要ではないでしょうか。今回のフィールドワークの中で、学生は体験的にそれを学び取っていたと思いました。